論文の内容の要旨

論文題目　アイヌ口承文学のエピステモロジー：対和人関係を語るウエペケレによる歴史批評

氏　　名　坂田　美奈子

本論文の目的は、アイヌの口承文学の認識論を通して前近代アイヌ‐和人関係史の叙述、認識を見直し、両者の交渉史についての別の枠組、語り方を模索するものである。本論文は三部構成になっており。第Ⅰ部ではアイヌ口承文学に関する研究史およびアイヌ口承文学のテクストとしての性格を検討する。第Ⅱ部では対和人関係を語る散文説話（ウエペケレ）を読み解きながら、それらの物語が基づく認識論について検討する。第Ⅲ部では歴史研究とウエペケレ分析の双方の方法を用いて同一のトピックを検討しながら従来の歴史学の問題点を考え、アイヌ‐和人関係史の叙述のあり方の展望を示す。

現在まで「アイヌ史」は主に和人の記録を資料として再構成されてきた。その一方で、「アイヌの視点」に立った歴史叙述は長年の課題であった。アイヌを歴史の主体として見出そうとする研究動向においては、交易主体や漁業経営主体としてのアイヌを発見したり、蝦夷地におけるアイヌと和人の異種混交的な接触をポジティヴに描写したり、ということがなされた。しかしながらその様な改訂はアイヌと和人の不平等な関係を遠景化させた口当たりの良い共生言説と見分けがつかないという状況を図らずも生んでいる。支配関係を強調すればアイヌを言説空間において再度従属的位置に配置しかねず、アイヌの主体性を強調すれば和人との不平等な関係が不可視化されかねないというジレンマをアイヌ史は抱えている。

これまでアイヌの歴史を考える上で、アイヌ口承文学の活用が幾度か提案されてきたし、そのような試みもいくつか存在するものの、成功してきたとは言い難い。その原因は、これまでの試みのどれもアイヌ口承文学を、実在的過去を探る資料として位置づけてきた点にあるといえる。しかしながら、アイヌ口承文学と歴史学が共通の議論の場を開けるとすれば、それは事実認識の次元ではなく、過去をどのように形象化するかという点、物語が基づいている認識論においてであろうと考える。本論では文学批評の方法によってアイヌの口承文学の認識論に迫りたいと考える。

口承文学のテクスト分析に対しては、オーラル文化は発話の場や社会的コンテクストを抜きには語れず、一回ごとの語りが尊重されるべきであり、理想的なテクストなどというものはない、という批判が予測される。しかしながら、筆者が注目するのは、アイヌ口承文学のテクストとしての側面である。オーラル文化と文字文化を各々本質化したり、そのような分析概念を用いて議論を普遍化したりするのではなく、あくまでアイヌにおいて口頭伝承がどのような歴史をたどったか、という点を重視すれば、近現代において、アイヌの伝承者たちが様々な形で自らのレパートリーを文字や音声として記録してきたという点を見逃すべきではない。アイヌ口承文学は研究者によってのみならず伝承者自身によって

もテクスト化されてきたし、その営みを過小評価すべきではない。伝承者たちは各々の思いや意図によって、時には学問の覇権的構造を認識した上でなお、アイヌ語を残すことを優先し、テクスト生産をしてきた。そのような伝承者を搾取されるインフォーマントとのみ位置づけることは適切ではない。現在アイヌ語は公用語としては存在していない。従って、オーラル文化研究の側から主張されるオーラル文化の独自性について受け止めるならば、アイヌ口承文学はオーラル文化衰退の物語を語るしかなくなってしまう。しかしながら、伝承者によるテクスト化は、多くがまだ見ぬ未来のオーディエンスへの伝承という意図をもってなされており、口頭文化と文字文化という対立概念を持ち込みさえしなければ、伝承の形態の変化の問題として考えることができるのだ。

アイヌの口承文学にはいくつかのジャンルがあるが、本論文で扱うのは主に散文説話（ウエペケレ）である。その理由はそれが、伝承者によって実話として受け止められ、自らの経験の及ばない過去、明治以前の時代を想起させる物語と認識されているためであり、アイヌ史研究で最も盛んな近世に関する歴史学言説と比較する上で適切であるためである。

ウエペケレの内容の圧倒的多数はアイヌ同士の関係やアイヌとカムイとの関係を語るものであり、和人が登場する話は多いとはいえないが、和人がモチーフとされる場合、その表象のされ方は、歴史学言説と比較して非常に興味深いものがある。まず、和人とアイヌは対抗図式として描写されない。善人（アイヌ、和人）と悪人（アイヌ、和人）という対抗図式が基本である。その善悪の基準はカムイ・アイヌ・和人が構成する世界のバランス維持にかかわる。各々に異なる役割があり、そのバランスによって生活が成り立つという点で、カムイ・アイヌ・和人は三者が運命を共にする単位、すなわち「生存ユニット」として認識される。和人とアイヌが対抗図式として描写されるのは、物語上の矛盾を物語が解決しきれない場合においてである。例えば漁場における和人のアイヌへの虐待・搾取といった主題の物語において、その課題が最終的に解決される物語においては、アイヌと和人を対立的に描かれないのに対し、課題が解決されずに終る物語においては、課題解決の代りに和人とアイヌの世界に線引きをして、両者が交わらないような状況を作って締めくくる。従って、アイヌと和人の区別が明確に行なわれ、両世界の差異を際立たせるような叙述は、ウエペケレの認識論においては、それ自体が矛盾の指標であると同時に矛盾を解決できない記述である、ということになる。また、和人経営の漁業におけるアイヌ収奪の物語において、アイヌの主人公が和人の殿の養子になり、「和人の風習」を行なって漁場に平和をもたらした、という物語がある。このときの「和人の風習」とは、ローカル文化としての和人の風習のことではない。というのは、この物語の主題は和人の経営する漁業における非道を解決することであって、和人の存在があっても「和人の風習」が行なわれていないことが問題となっているためである。また「和人の風習」を行なって問題を解決したのは和人ではなくアイヌの主人公である。ここで目指される「和人の風習」とは、社会の理念的な姿であって、支配的文化への包摂といった意味をもたない。このようなレトリックによって、いわゆる和人文化への包摂、アイヌ文化の衰退という文脈で語られてきた「同化言説」について、再考の可能性が開かれる。

以上のようなウエペケレの認識論によって歴史学言説の特徴が明らかになる。歴史学はアイヌ、和人、松前藩、幕府といった文化的身分的属性を基準に人を峻別し、それを単位として、主に政治経済的な関係に関心を寄せる。しかも各主体は序列的関係に配置される。

一方、ウエペケレはカムイ・アイヌ・和人を全体でひとつの単位とする全体論的な認識論にたつ。この場合、各構成員は各々の差異と役割をもちながら一つの世界を維持しているのであり、支配や包摂という問題は発生しない。従って歴史学的に言えば支配関係が存在したはずの場面でさえ、そのような力学は言及されない。

ウエペケレで描写されるアイヌ - 和人関係のあり方はヴァリエーションが豊かであり、友好関係も抑圧的な関係も、裕福なアイヌも貧しい和人も登場する。歴史学においてはネガティヴにしか評価されないような、アイヌを使役する和人経営の漁業を肯定する物語がある一方で和人によるアイヌ虐待の物語があり、経営者側にあるアイヌもいれば、奴隷のように使役されるアイヌもいる。ウエペケレの認識論は、アイヌ - 和人、支配 - 抵抗といった対抗図式に基礎づけられていないために、二極間の綱引き状況に陥ることも回避できている。ウエペケレが描き出すのは、アイヌと和人を単純に切り分けることのできる世界ではなく、多様なアイヌのあり方と、多様な和人との関係のあり方の、どれもがアイヌの生き方なのであり、和人との関係は即座にネガティヴな効果やポジティヴな効果をもたらすのではなく、個々の状況において評価されるべきものなのだ、という考え方である。ウエペケレの認識論によって歴史学が批判されるのは、その余りに平板で単純なアイヌと和人のカテゴリー化である。

アイヌのウエペケレの認識論に照らして、歴史学が陥っているジレンマが、そこにおいては問題とならないという点が見えたとき、はじめて歴史学が語る世界が過去の事実の叙述であるというより、和人の認識論であるという点に気付くことが出来る。ウエペケレはアイヌと和人の関係についてのナラティヴを、歴史学研究が手にしているよりもはるかに多く持っている。従って、歴史学が過去の事実を明らかにしても、それについて柔軟に考えることができないのに対し、ウエペケレは過去の特定の事実を明らかにすることはできないにせよ、どのように考えるべきか、という点についてははるかに多くの手をもっている。歴史学が確認できる特定の過去を、ウエペケレのナラティヴと認識論によって批評することによって、和人の認識論としての歴史叙述とは別の歴史の見方を提起することが出来るのではないかと考える。